

高齢期の Sexuality と 『般若理趣経』 十七清浄句の 関係について

松本賀都子

はじめに

わが国では、高齢者問題は欠かすことのできない大命題であり、実際に「Well-being」「Active aging」「Successful aging」といった新しい考え方が、高齢期の過ごし方として提唱されている。しかし、わが国の文化のなかで育まれてきた日本人のこころ、そのスピリチュアルな部分までもを包括し、高齢期の生き方を提案していくためには、欧米の文化を基にした理論ではなく、わが国独自の理論の構築が望まれる。特に Sexuality という非常に個人的な分野から高齢者の生き方を捉えようとした場合、一五〇〇年ものわれわれの精神文化の根底をなしてきた仏教思想の影響を無視することはできない。

筆者は、我が国の高齡者問題は仏教の視点を根底に提言していくことが重要であると考える。そこで今回は、真言宗の常用読誦經典でもある不空訳『大楽金剛不空眞實三摩耶經』（略称『般若理趣經』）の初段、十七清淨句とも呼ばれている「大樂の法門」から高齡期の Sexuality のあり方を探ってみたいと思う。この經典には、一切の自性清淨を説明するために、男女間で交わされる性的な行為が取り上げられている。そのため、日本において重要視されてきたどの仏教經典よりも、人間の Sexuality を真正面から見据えた經典であると考えたからである。

1、Sexuality 充足感の重要性

老人の性行為は、日本人にとっていまだ受け入れがたいものがあるようだ。人は年をとるにつれ枯れてゆき、最後は枯れ木のように朽ち果てる。当然性的欲求も、年とともに枯れてゆくべきものであるとの考えが一般的である。特に若いときほど枯れていくことを理想視する傾向が強いようだ(1)。「執着を離れて淡々と枯れた老人のほうが、日本人の美意識には合うのかもしれない(2)」と藤久ミネがいうように、どろどろとした性欲から自由になり、清淨なる精神世界の充足を求め、淡々とした日々を送る老後を理想としている人は老若男女を問わず多いであろう。しかし、思い通りに性欲が枯れていくとは限らない。ある七十六歳の男性はつぎのように述べている。

「妻を亡くして十一年…『男』の煩惱をどうすることもできもはん。人生の本を読んだり、俳句を作ったり、商売に打ち込んでも妄想があとからあとからわき起こってきます。『老人の性はいやらしい』とよく言われますけど、あるものはいしやうがない。いい女性と知り合いたい、結婚したくてソシアルダンスを六十五歳のとき覚えもした。…配偶者をなくした健康な大部分の老人は、これまでの社会通念にとらわれ、虚しい日々を送っているんです。異性と長く接していないから、むしろ老人は若者より性に飢えています(3)」

もともとある性的な欲求に対抗するには、精神世界の充足だけでは事足りない様子がつづられている。一方女性はどうであろうか。閉経により否定なく生殖の性を手放さざるを得なくなることで、性的な関心からも遠ざかるのであろうか。六十三歳の女性はつぎのように述べている。

「恋は若者だけの独壇場といわれるかもしれませんが、老いらくの恋もまた、残り少ない人生を美しく楽しく過ごすには、とても大切だと思うのです。この人ならと思うような人に、めぐりあえたなら、迷わず積極的に飛び込んでゆきたいと思います(4)」

女性は閉経後も異性を積極的に求める気持ちを持ち続けていることがわかる。高齡になっても「性的妄想」を持って余していたり「老いらくの恋」を求めているたり、男女ともに、世間一般で考える枯れた老人像とはかけ離れた現実がここにはある。

性別を持って生まれるわれわれにもともと具わっている性的な関心や欲求を Sexuality と定義すると、Sexuality 充足欲求を抑えつけたままの状態はどのような影響をわれわれに与えるのであろうか。報告されているものをまとめると表1のようになる(5)。これを見ると、欲求不満の影響が身体症状、生活習慣、性格傾向、精神面といったさまざまな面に表出していることがわかる。中には個人の人格として理解されがちなもの

や、老人特有のものと思われる事柄も含まれているが、それらも実は「愛し愛されたい」という欲求が満たされると、たいいていの場合、問題は解決されるといいう(6)。

表1. 老人の潜在的・顕在的性的不満の影響

自分へ向けられる	周囲へ向けられる
<ul style="list-style-type: none"> ・ 不定愁訴 ・ 抑うつ ・ 希死念慮 ・ 会陰痛、尾骨痛 ・ 大酒を飲む 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 家族間不和—夫婦・親子・嫁姑(舅) ・ 他者への激しい攻撃 ・ 付き合いづらさ／気難しさ／小言／人間嫌い／怒りっぽさ／ひがみ／意地悪／悪口 ・ 家人を疑う

性的欲求不満の悪影響とは逆に、充足された時の効用も多く報告されている(7)。その中のいくつかを紹介すると、

「特別養護老人ホームで混浴を実施したところ、それまで動きの悪かった老人も異性を意識するようになり、いままでしなかった着替えも自分でできるようになった」

「配偶者死別女性(七十八歳)が不眠、頭痛、食思不振、膝関節痛を訴え来院するもなんの異常もなし。本人は片足を引きずって歩くほどの痛みがあるという。ところが、老人会入会を契機に男性の友人が見つ

かり、電話でやりとりするようになると、身体症状のほとんどは消失してしまった。そればかりでなく機嫌もよくなり、おしゃれをするようになった」

なくそうと思ってもなくしきれない Sexuality 充足欲求、それを無理やり抑え込むことによる数々の弊害。逆に満たされたことで得られるさまざまな効用。それらの事柄を高齢者の身になって考えるのであれば、厳然と存在する欲求を積極的に評価し、その充足感を価値あるものとして認めていくことが重要であるといえよう。年相応に老けこむことを暗に強要する社会から、老いてもなお異性に関心を持つことを評価できる社会へ、その転換が、高齢社会を迎えた現在、切実に求められているというのが隠された現実なのではあるまいか。

二、性欲の否定から積極的肯定へ…大衆思想の展開

密教の重要な思想のひとつに大衆思想がある。倉西憲一は大衆 (mahāsūka) の基本的概念を「聖なる存在である絶対者(『理趣経』では金剛薩埵 Vajrasattva)と同じ境地に立つこと、すなわち同一化である」と述べている(8)。後期インド密教に分類される無上瑜伽タントラ (anuttarayoga) では同一化の手段として性的な実践が行われるようになったが、それよりも早い時期に成立した瑜伽タントラ (yoga) に位置する『理趣経』では、般若理趣すなわち空の立場から見れば性欲でさえも清浄である(8)と、その本質的清浄を積極的に肯定している。そもそも理趣経は、インド中期の代表的な密教教典『金剛頂経』の一種であり、大乘仏教の代表的な教典『般若経』の思想を基盤として成立した教典である(9)。ゆえに般若経の空の思想と、金剛頂経の積

極的な現実肯定の思想を根拠に、本来であれば煩惱として否定される性欲をも、本質的には清浄であると肯定し得ているのである。

では、初期の仏教經典においては愛欲にたいする戒告と否認がいたるところに頻出している(10)にもかかわらず、なぜ『理趣経』においてそれが積極的に肯定されるに至ったのであろうか。そこにはそうならざるを得ない必然性があるはずであり、それを梅尾祥雲は大略次のように述べている。

「根本仏教が形式化、理論化していくことで部派仏教となり、仏教の眞生命はそこで失われてしまう。その復古運動として起こったのが大乘仏教ではあるが、それもいつしか理論化し、形式化してゆく。仏を理想化すればするほど凡人が仏になることは不可能になっていき、ついに凡身に即して仏になれるという眞言道(眞言乘)(11)が起る。ここでは性行為も空性となり、妙樂の境地である涅槃を現実の世界で実現するという大樂の思想へと発展していった」(12)

つまり、理論化し形式化した仏教では凡人を救済することは不可能となった。そこで凡身即仏を可能にするためにも、凡人を凡人たらしめている煩惱の中で最も御し難い性欲を、涅槃を実現するための宗教的体験の中に取り込み、それを空觀の力を借り浄化し積極的に肯定していくという思想的発展の必然性があったのである。

また吉原瑩覺はつぎのように述べている。

「密教においては経験界の諸法は『空』であるとの認識の上に、人間の本能的欲情を方便として活用することによって、『理趣即愛染』の『大樂』(自利他円満)の至境を実現しようとするものである」(13)

人間の本能的欲情であっても、それは大樂の境地を得るための方便であるとその行為を肯定している。

このようにして、『大涅槃経』で「二十五有及愛煩惱」と説かれた愛欲が空觀により浄化転生され、性的悦樂さえも肯定される『理趣経』大樂の法門へと展開していくのである。

三、「大樂の法門」と高齢者

・「大樂の法門」

ここで取り上げるのは唐代に不空によって翻訳された『般若理趣経』(大正八、七八四頁収載)と略称されるテキストの初段「大樂の法門」である。

そこには一切法の自性清浄を説明するために、男女間で交わされる性行為は完全に清浄であるとする「十七清浄句」が説かれている。それは梅尾祥雲によれば「二根交會の快樂を種々に分解したもの」(14)であり、金岡秀友によれば「性欲の本質肯定の句」(15)とされている。しかし「そのすべてを観察するとき、それがただ性欲肯定の句であるのみならず、さらに進んで人間存在自体の完全な肯定であることに気がつかざるを得ない」(15)という金岡や、「若し心の眼を開いて此等の一切法の本当の姿を實の如くに觀照することになれば、それが般若波羅密であると共に、その境地よりせば何一つとして清浄ならざるものはない」(16)と梅尾がいうように、単なる肉体的な快樂賛美がこの經典の意図ではない。

この經の本旨は「自性清浄の絶対の境地を自ら体験して、永劫に滅することのない絶対の大安樂を享受する

と共に、これを必ず一切のものに与えんと金剛薩埵の心境を示すこと」(17)であることから、永劫不滅の大楽の境地を説いたものとして「大楽の法門」とも呼ばれている。「大楽」であるからには、自分のみが快樂を享受し自己満足するのではなく、必ず一切のものに与えんという利他的なものが説かれていることも強調しておかねばならない重要な点である。

・授くる資格を持つ上等級の人

『理趣經』が示す絶対者は金剛薩埵 Vajrasattva であり、心の眼を開いて空性(宇宙の実相)と合体融合し、大楽の生活を実現し、それを一切の人に与えんとする人(自ら永遠不滅の金剛の本質を担って生きる人)である(18)。その金剛薩埵との同一化を象徴するために「大楽の法門」では、二根交会や妙適(Surata)といった性交渉に関係する言語が使用されている。そのため「もし個我に執し、情欲に溺れ、愛縛に囚われた身でこの思想を解釈するならば、大きな危険を孕むことになる」とし、金剛乘の成立当時より、この經典の公開を禁じ、特種の人にのみ、これを授くる様にした」(19)のであるという。そこでの「特種の人」とは、人を下中上に分け上等級に属する人を指す。原文資料入手困難のため『理趣經の研究』の引用を要約すると、「因陀羅部底(Indra-bhūti)や佛陀瞿耶耶(Buddha-guhyā)などに依ると、動物的欲望にのみ支配される動物階級、自らの修養に向かつて精進する勇猛階級、一切のものに神性を発見し得る神聖階級の三等級に人を分け、動物的衝動に支配され易い下等級の人には禁欲苦行を主とする作法儀軌(Kīrtā-tantra)、修養に精進する中等級の人には行儀軌(Carya-tantra)、一切のものに神聖を発見する上等級の人には瑜伽儀軌(Yoga-tantra)若しくは無

上瑜伽儀軌(Anutarayoga-tantra)を説くことになっている」(20)という。したがって瑜伽タントラと無上瑜伽タントラで説かれる大楽は、上等級の人のみが授けられる資格を持つことになる。

では、密教入壇灌頂を経ない現代人でもこの教えを授くる資格を持つことができると仮定した場合、どのような人が上等級に値するのであろうか。

その考察のために Sexuality 完成度を試みに下中上と三等級に分けてみよう。性欲の面ではまだまだ動物的傾向が強い思春期の男女、彼らは学業に専念するため Sexuality は禁欲さえも求められるという意味で下等級に分類されよう。また、成人となりよき配偶者を得、家庭を持ち、性欲は安定的に充足され、男女の愛が同時に子育てをも実現するという意味で成壮年期の Sexuality は修養的であり中等級に分類されよう。生殖の必要性もなくなり、その能力も減退もしくは停止した高齡男女は、動物的性欲よりも精神的性欲をより多く求め、異性に神聖なる尊敬性を見出し、自己の性的満足よりもむしろ相手の満足感を尊重するという利他的な面も強まるようである。その意味で高齡期の Sexuality は上等級に分類できるのではないであろうか。

また EH Erikson らの『老年期』によれば「高齡期とは、人生の心理社会的発達最終発達レベルであり、それまでの人生経験で汲み上げた自分らしさを懸命に統合しようとする、人間の努力と英知の時期である」(21)といわれ、心理的にも社会的にも高齡者は人生の最終発達レベルにあることが示されている。

さらに仏教でも『雜寶藏經卷第一』の「棄老國縁」(大正四、四四九頁上)では、經驗智で国を救った老父を「兩時父者、我身是也」、「而常讚嘆恭敬父母者長宿老」と、經驗に裏打ちされた老人の知恵の深さを指し「釈尊である」と最大級の賞賛をもって敬っている。この教典からも、深き知恵を持つ高齡者を上等級に分類すること

に根拠があるといえるであろう。

したがって、密教入壇灌頂を経ないわれわれの中で「大楽の法門」を授くる資格を有するのは、老年期を迎えた人以外にはありえないであろう。しかし大楽を実現させるためには、上等級の人であることに加え、生命力としての愛(22)をただしく理解し、心眼を開き、性欲をただしく取り扱える能力が必要とされている。その愛は梅毒のいうように「情熱的であっても、盲目的であってはならない。それはたゞに、感情のみの愛ではなしに、全一を生きる智慧にとけ込んだ愛ではなくてはならないので、その愛することが、愛せらる、人を悩ましたり、傷けたりするのではなく、常にそれを伸ばし、それを育て、ゆくものでなくてはならない」(23)のである。ここでも利他の必要性が強調されている。

長い人生に於ける経験に裏打ちされた智慧を持ち、自利利他円満の「理趣即愛染」、すなわち、大楽の境地を実現できる能力を、心が次第では持つ可能性があるのは高齡者のみで、この人々にこそ、その精髓を参照にした生き方が説かれることが相応しい。さらにそのことが、この經典を現代に活かすことになると思われる。

四、高齡期の Sexuality から読む「十七清浄句」

『般若理趣経』をヒントに、真の Sexuality 充足に至る生き方について考えていくことにしよう。まずは「大楽の法門」と呼ばれる十七清浄句を挙げる。

説一切法清浄句門、所謂妙適清浄句是菩薩位、慾箭清浄句是菩薩位、觸清浄句是菩薩位、愛縛清浄句是菩

薩位、一切自在主清浄句是菩薩位、見清浄句是菩薩位、適悦清浄句是菩薩位、愛清浄句是菩薩位、慢清浄句是菩薩位、莊嚴清浄句是菩薩位、意滋澤清浄句是菩薩位、光明清浄句是菩薩位、身樂清浄句是菩薩位、色清浄句是菩薩位、聲清浄句是菩薩位、香清浄句是菩薩位、味清浄句是菩薩位

「一切のものすべては本来的に自他の対立を超えて清浄な本性を持つ、そのことをこれから説きましょう」とまずは主題の提示がされている。それに続く十七の句では、人間の持つ四根本煩惱(慾・觸・愛・慢)が完全に「清浄なもの」と肯定されている。この考えに立てば、老いらくの恋は清浄なる菩薩位にある行為であり、「年がいもなく」や「いい年をして」という否定的な受け止めかたではなく、逆に、いい年を経て来たからこそ「おかげさまで」「恵まりました」という肯定的な受け止めが可能となる。もし、社会全体が高齡期に至り得た人々の Sexuality 完成度をただしく理解するに至るならば、老いらくの恋をも暖かい眼差しで受け止められる、成熟した社会が可能となるのではないだろうか。

以下、菩薩位とされている妙適(Surata)・慾箭・觸(Kelikita)・愛縛・一切自在主・見(Dṛṣṭi)・適悦(Rati)・愛(Tṛṣṇā)・慢・莊嚴(Bhūṣana)・意滋澤(Ahlādana)・光明(Aloka)・身樂(Kāya-Sukha)・色(Rūpa)・聲(Sabdha)・香(Gandha)・味(Rasa)について、高齡者の現実的な Sexuality から解釈し、その関係を図に表してみよう(62頁参照)。ただし、ここで論じるものは高齡者の生き方に即して十七清浄句を捉えようと試みたものであり、『般若理趣経』の順序とは異なる。

「見」 Dr̥ṣṭi

「見」を仏教辞典(24)でみると「欲心をもって異性を見ること。異性を見て美感を生ずること」となっている。この説明からは、欲心がありそれを満足させるために異性を見る場合(欲心↓見)と、異性を見て欲心が生ずる場合(見↓欲心)の二通りの解釈が可能である。では、異性を見て欲心が生じる様子を六十二歳男性のことばから見よう。

「自分はいま、何かと役員を仰せつかっているが、会合も多く、婦人層に接する機会も多い。言わずもなだが、よその奥様がよく見えて当惑する。すてきな人、面倒見のよい人、口には出さずとも、男も女も求め合う」(25)

これは活動的な高齢者が外出の先々で経験している「見」であると考えてよいであろう。

では寝たきりの高齢者の場合はどうか。思いを寄せた異性を「見たい」との願いがいのちを支える力ともなる。例えば、毎朝回診に病室を訪れる男性医師に恋心を抱く高齢女性が、身支度を整え、薄化粧をして医師の訪れを待つという姿はどの病院にもあることである。今日会えたことを喜び、明日も会えることを願う一日を過ごす。そのように考えると、「見」が高齢者の Sexuality 充足に果す役割は大きい。

「慾箭」

「異性に向かって矢の如く急速に動く欲望。それが一切衆生を濟度せんとする大慾となる」と神林隆浄は解説している(26)。これを実際の高齢者の生活を考慮して解釈した場合、サークルや趣味の会で出会った異性に

好意をもち、「この人のために役立ちたいと願うこと」となるであろう。恋しい異性のためならばこの身を犠牲にしてもつくしたいと願う気持、言い換えるならば、自分を捨てて他人のために尽くすという菩薩道が「慾箭」には含まれているといえよう。

いづれにしても、異性を見ることで生じた美感が性的発動力となり、交際したい、尽くしたい、触れ合いたいという欲望が生じる。その欲望があるからこそ「会いたい」という願いが生まれるのである。その意味で「見」と「慾箭」とは切っても切れない関係にあり、図では両者を行き来する情動を上下の矢印で示している。

「觸」 Kelikā

梅尾は「慾箭によりて男女抱擁する所」(14)と解説しているが、筆者はこれを「触れ合いたいとの願いから、好意を持った異性の身体に触れること」と解釈する。乳房や性器など性感帯への接触は勿論のこと、マッサージや手を握るといった一般的なスキンシップも含めた広い概念で捉えていくべきことであるといえよう。ただし、配偶者以外の男女間では、たとえ「触れ合いたい」との欲求が生じたとしても、(特に、性に厳しいしつけを受けた高齢者にとっては)倫理観や世間体が障壁となり慾箭から觸への道は閉ざされることとなる。また配偶者間であっても「女が性のことを口にすることははしたない」との思いが強い場合、妻から夫に性的な接触を求めることは稀である(27)。日常的な性的コミュニケーション不足のため、相互の性的欲求に無頓着となり、夫婦ともに親密な触れ合いを重視しなくなる傾向にあるのが今日のわが国の現状であるようだ。

高齢期の Sexuality 充足を妨害するものとしては、世間の目、社会通念、本人の意識などさまざまな要因

が存在している。しかし、一旦「觸」に至るならば、そのあとは図が示すように、妙適の世界が展開し、自利他円満の恍惚境が開けていくことを理趣経は教えてくれている。理趣 (naya) とは連れていくもの、導くものという意味がある。ひとりでも多くの高齢者が自利他円満の世界へと導かれるためには、高齢期の Sexuality 充足感の重要性とスキンシップがその重要な手段となるという認識が、社会にも個人にも強く求められよう。

「妙適」(Surata)

妙適を「男女の性交渉における快楽を意味する」と解説するものは多い。例をあげると、金岡は「男女交媾の恍惚境」(15)、神林は「微妙適悦で、身心恍惚として亡我の妙境に入るの意」(28)、梅尾は「男女の二根交會するときの快楽」(14) などである。理趣経の初段が「大楽の法門」といわれているのもこの妙適の句が説かれているゆえである。しかしこれを高齢期の Sexuality から考えた場合、性交渉を必要としてしているかといえれば必ずしもそうともいえない。新国訳大藏経で妙適を「よき悦楽の意で、男女の性交の楽しみの意味も含む」(29) と解説するように、性交渉の楽しみは含まれてはいるものの、その主たる義は「よき悦楽」であると解釈するのが適切であると筆者は考える。そのような快楽に浸ることは、たとえ直接的な性器の挿入が行われずとも可能であろう。特に肉体的な快楽という面より精神的な悦楽、もつといえれば男女二根の交会というよりは、心と心の交流、情愛の交し合いといった側面をより重視する傾向にある高齢者では、そのように理解する方が適切である。もつとも男性器勃起能力の低下により、性行為どころかスキンシップさえからも遠ざかっている

カップルも存在するが、そのようなスタンスでは大楽の法門を享受する資格はない。

大楽思想でいう二根交會は「この現象世界に即して、慧と方便、大智と大悲との二なる生活、実相と融合する二而不二の生活を表すための比喩的言語に過ぎない」(30) と梅尾も述べているように、妙適に至る手段として、性交渉の有無にこだわることとは、本旨からはずれているといえよう。

「妙適を分析して示したものが慾箭・觸・一切自在主・愛縛であり、それらは人の弱点であり、性欲の満足を表現したものである。これを観念的に宗教的に浄化することを強調しているのがこの経の目指す所である」(31) と神林はいうが、筆者は慾箭が觸という具体的な行為により、妙適に至り、その充足感が適悦、一切自在主(慢と同一)、愛縛、愛へと発展していく(図参照) と考えたい。しかしこの段階では、身的・心的満足感はいまだ自己内に止まっている。

「適悦」Rati

神林は「身心に快適を感じずる悦楽」(28)、梅尾は「觸によりて生ずる喜び」(14) と解説しているように、「適悦」とは妙適から発展した喜びと同時に觸からも得られる喜びであり、異性との触れ合いから得られる快楽をさしたものと見える。

触れ合いから得られる身心の喜びを高齢者のカップルで考えた場合、相互に身体の凝りを揉みあい、ほぐしあうことで得られる気持ちよさが一例としてあげられよう。このことから、スキンシップが高齢期の Sexuality 充足感を満たすための重要な手段となることは明白である。

【愛縛】

梅尾は「觸れによりて男女離れ能はざる心を生ずる所」(14)と解説している。愛欲のために互いを愛しく思い、「離れたくない」「離したくない」といった執着が生じる。愛の煩惱は嫉妬心をはじめとしてさまざまな争いを生む。しかし「愛縛」の状態がそのままに生きる甲斐となり、生活の潤いとなる場合もあるのではないだろうか。配偶者を喪失し寂しい生活を余儀なくされた七十歳の女性は、一人の男性との出会いをつぎのようように語る。

「毎日が新鮮で、以前にも増して充実した生活を送っています。この生活をいつまでも、永く永くつづけたいと思っています」(32)

このように喪失体験を重ねた高齢者にとっては、愛縛の状態が充実した生活に結びついているのである。それは単なる執着というよりも、男女が離れないための自然なあり方、本来性(清浄なるあり方)といえよう。

觸から「離れたい」という思いが生じ、それが男女の本来性であるとする、喪失体験の有無にかかわらず、人間にとって、男女間でのスキンシップの重要性は疑うべくもないことである。具体的なスキンシップが身体的接触のみならず、精神的接近をもたらし、性的な欲求を満たすと同時に、精神の安定、こころの健康、生きる喜び、何かに向かってアクティブに取り組もうという気力、生きようとするエネルギーを引き起こすといったことなどは、高齢者介護関連の書物では周知の事実である。

【一切自在主」と「慢】

「異性を思うがままにすること」と「異性をわがものとしたという満足感」のように新国訳大藏經(29)では解釈されているが、「思うがままにする」ということはが示す心のおごりや自己中心の満足感という心地ではないように思う。もつと穏やかに満ち足りた状態を示していると考えたい。好意を寄せていた異性と漸く思いが通じ、肌と肌を寄せ合い、抱擁を交わし満足しあう。相思相愛の男女は、「愛したい」という欲求と「愛されたい」という欲求の両方が満たされ、世の一切に自由であるような心境になる。そのような心境が一切自在主であり、そのような心境に満足していることが慢であると考えたい。

ここでも肌と肌を寄せ合うというスキンシップが「一切自在主」と「慢」に至る重要な手段となっていることに注目したい。

【愛】 Tisna

異性と出合い(見)、相互に魅力を感じこころ惹かれあう(慾箭)。そして触れ合い(觸)たいとの思いが通じ、相思相愛(妙適)となる。お互いの存在に満足(適悦)し、離れがたく思う気持(愛縛)に縛られるが、そこで自分のみの満足を追求していくとしたら、愛には至れない。なぜなら「一切衆生のために化他の愛縛を本として一切衆生を悉く涅槃に趣入せしめんとこのころを生ずるが愛清浄」(33)と梅尾がいうように、相手の充足感を願う利他的な気持が先にたたないと、愛にはならないからである。狭い自我に囚われた自己中心の性行為は、愛清浄句は菩薩位にはなり得ない。これを高齢期の Sexuality で考えてみると、加齢による機能低下を丸ごと受け止め、双方ともに相手に満足感を得られるよう尽くし合うということになるであろうか。

以上、見・慾箭・觸・妙適・適悦・愛縛・一切自在主・慢・愛の清浄なることを高齢期の Sexuality から考察してきたが、ここまではまだ自分の側からとらえた状態にとどまっている。たとえ相手を丸ごと包み込み愛しく大切に思いやるとしても、こちら側の気持の幅内のことであって、あくまでも自

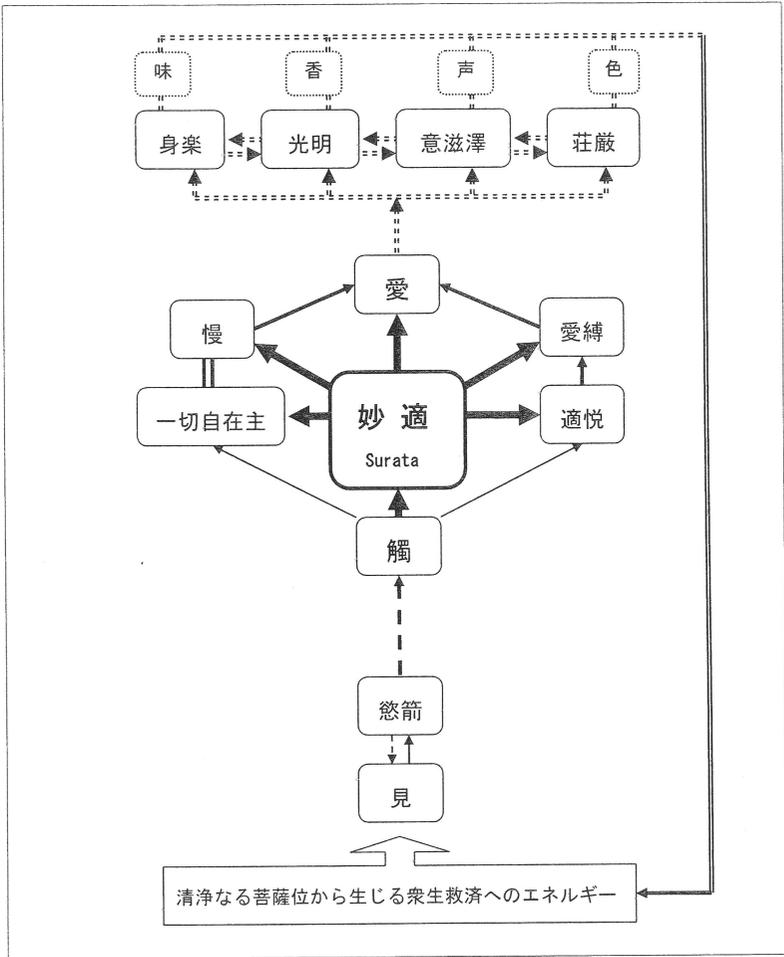


図1. 『般若理趣経』十七清浄句で示す高齢期の Sexuality 充足図

「愛」から先は、金剛薩埵と一体となる境地に至ることになる(図では点線の矢印で示してある)。ここで重要なことは自利のみならず利他が円満しているかどうかである。ここからは相互の満足感を高め合おうとする「自利利他円満」の姿勢が必要とされる。

金剛は十七清浄句の前半の八句は有情世間の本質的清浄を説き、後半は器世間の本質的清浄を説いたものであると説明している(34)が、筆者はこの後半の部分は高齢者の自利利他円満の Sexuality であり、その様子は表面と内面に分けられると考える。すなわち表面的な Sexuality (身楽、光明、意滋澤、莊嚴)と内面的な Sexuality (味、香、声、色)とに分けられると解釈していく方が適切であると考え。その表面と内面の様相についてみていくことにしよう。

「身楽」 Kāya-sukha y 「味」 Rasa

「身楽」は、ただ単に「身体が楽になること」(35)といった身体面を重視する解釈よりも、むしろ「慢によりて凡ての怖畏を忘れた所」(14)と母尾がいうように、精神面を重視した様相であると解釈すべきことからあろう。高齢者カップルが信頼しあい支えあって、すべてに安心しきって生きる姿といえる。その状態であれば顔は穏やかな笑顔に包まれる。「味」は身楽であるその人の内面を表し、豊かな人間性や人柄の温かさが「持ち味」となって、周囲の人たちをも幸福にしてゆけるのである。

ここで老人ホーム入居者全員の前で三三九度を挙げたキサエさん（七十九歳）と博和さん（七十七歳）の会話から、二人の身楽の様子を見てみよう。

「毎朝思うのはネ、目をさました時二人でお茶を飲めるのがいちばん幸福だなあとということだよ」と話しかけると、「私はじいさんの顔を見ているだけでいい」と笑う（36）。

身寄りのないもの同士がホームの四畳半に二人で暮らすその姿は、肩の力が抜け安心しきった身楽そのものである。二人は古い先短いとはいえ、味のある人生を共に噛み締め、至福の時間を共に支え合って歩んでいくのである。

「光明」Āloka ㄹ 「香」 Gandha

金岡は光明を「（秋の名月に照らされたごとく、自然界が）光明かがやくこと」（37）と器世界のこととして解釈している。いっぽう梅尾は「渴愛によりて前途に光を認むるが光明」（14）であるとし、明らかに男女間の愛の行為の中で認められる光であることを述べている。筆者は Sexuality の満足感が男女相互間に円満に充足されている状態が「光明」であると考えるのが適切であると考ええる。

自分は愛し愛されているという確信に満ちた人は生き生きと輝いて見えるのではないだろうか。あるいは、自分を頼りにしてくれる人がいるという自信、または自分には頼れる人がいるという安心感、それが生きる力となり、人を輝かせるのではないだろうか。「光明」とはそんな状態であり、「香」とは自利利他円満な Sexuality からこぼれ落ちる色香であり、醸し出される雰囲気であり、漂う色気であるといえるであろう。

「意滋澤」 Ahīdāna ㄹ 「圀」 Śabdha

自利利他円満で、双方ともに満ち足りた状態であればこころも潤い、周囲への気配りにも余裕が出てくる。そのような状態が「意滋澤」であり、そのような人の話すことばはやさしく、その「声」は慈愛に満ちているのではないだろうか。ここで、表1の「老人の潜在的・顕在的性的不満の影響」を再び参照してみよう。周囲へ向けられる影響の欄に記載されている家族間不和、他者への激しい攻撃、付き合いづらさ、気難しさ、小言、人間嫌い、怒りっぽい、ひがみ、意地悪、悪口、家人を疑うなどは、すべて「意滋澤」ではない状態が外に向かつて表出した形であるといえよう。

高齢期は親しい人と死に別れ孤独感が強まる時期でもある。周囲から明るい声で、あるいは優しい声でことばをかけられたならどんなにか孤独感は癒されていくことか。ことばとことばとは相応する表裏である。ましてや「声」の相手が愛する人であったとしたら、その喜びは「光明」となり、老いた魂を温かく包み込み「意滋澤」へと導いてくれることであろう。

「莊嚴」 Bhūṣaṇa ㄹ 「卮」 Rūpa

ある老人施設で男女混合病室を実施した結果、無精ひげの男性がひげを剃り、女性は顔にクリームをつけ始めた（38）。「莊嚴」とは「身を飾りたてること」であるが、その行為を起こさせる原動力は異性を意識したとみに生じる欲求であるといえるのではないだろうか。老人クラブやサークルの集まりでは、男女ともにさりげ

ないお洒落が欠かせない。ある男性は集まりのある朝は異性を意識して、いつもより念入りに髭を剃るのだそうだ。異性に会うということで、普段とは違った気持が湧き起こり、それが身を飾る、あるいは整えるという行為になったといえよう。

終日ベッドの上で生活している寝たきりの人や、多くの世話なくば生きてさえいられない状態の人であっても、朝は着換え、髪をとかし、身なりを整え、男性であれば髭を剃り、女性であればクリームを塗り口紅ひく。それはわれわれが社会生活を営む証であり、尊厳を持って今日という一日を送っていくための意味ある行為であると筆者は考える。

また「色」とは物質的な概念であると捉えられがちであるが、ここでは身を莊嚴するための物質としての色だけではなく、莊嚴された人の堂々とした物腰や自信に満ちた態度、顔の表情、色気、尊厳性なども含めた、その人から映し出される色と考えることが適切であろう。

五、高齢カップルに実現された十七清浄句

自利他円満の大楽に至れているのではないかと思われるカップルを特別養護老人ホームでの事例から見てもみよう。正雄さん（八十歳）は軽度の認知症で、タネさん（八十九歳）は腰の骨を折ったのホーム入りである。

お互いの存在を知ようになったのは、リハビリテーションを兼ねたクラブ活動。二人は月曜から金曜まで毎日顔を合わるようになる（見）。お互いに気が合った（慾箭）のであろうか。いつも隣り合って行

動をともし寮母の目にはほほえましい姿として映る。ここまではまだ「見ひ慾箭」の状態で觸には至っていないと思われる。ところが正雄さんのかぜの看病（觸）をきっかけに二人の仲は急速に進む。お互いの部屋を行き来する光景がひんぱんに見られ、寮母が部屋を巡回中、抱き合っている二人を目撃する日も多くなる（妙適・適悦・愛縛・愛・一切自在主・慢の状態であると考えられる）。事情により正雄さんは一旦家へ帰るのだが、自分の意志でホームに舞い戻り、「タネさんと一緒にになりたい」と熱く訴え寮母を驚かせる。寮母らは二人の強いきずなに心打たれ「異性を求めるのは自然の摂理。いくつになっても変わらない」と、周囲の了解を取り内縁の祝儀を挙げさせるために奔走する。

その後、正雄さんにボケ症状は見られなくなり、頭髮の薄いタネさんもかつらをつけるなど自利他円満の二人はますます若返っていく⁽³⁹⁾。

この事例では「慾箭」から「觸」さらに「妙適」へと至るためには、かぜの看病というきっかけと、二人の交際に周囲が寛容であったという条件が必要であった。周囲の理解も手伝い Sexuality 充足欲求が自利他円満に満たされた二人はすでに大楽の境地に住し、「身楽（味）・光明（香）・意滋澤（声）」であることは疑うべくもないことであろう。

結 語

不空訳『般若理趣経』をテキストに、現代に住する高齢男女の Sexuality 充足図作成を試みた。この図を通

して述べたかったことは、まず「觸（スキンシップ）」の重要性である。人間であれば、「異性と触れ合いたい」と思うのは当然であろうが、さまざまな要因でその欲求が抑圧されているのが高齡者の置かれている現状である。本人と周囲がその欲求を満たすことの重要性を認識しさえすれば、その後、妙適からさまざまな清浄句へと発展し、ついには金剛薩埵との同一化も可能であるのだ。高齡期であっても本来清浄である Sexuality を自利他円満させていくことは、現実生活の中で、本人のみならず周囲をも涅槃へと救いとしてゆく可能性が与えられているということである。さらに、そのような生き方を仏教は提示可能であるということ。また、その生き方を実践してゆくことが如いては『理趣経』の教えを現代の高齡社会に生かしていく道であるということである。

高齡であり障害があっても、男女ともに睦みあい、穏やかに満足して暮らしていくことができるのであれば、それは人間としてもっとも自然であり、清浄な姿であるといえる。その道しるべとして『理趣経』の教えは見直されるべきであると考ええる。

『理趣経』には、われわれ人間にあるべくしてある性欲を、たとえ高齡期であったとしても自然な姿で充足させていくための智慧がふんだんに説かれている。まずは高齡者の性的な欲求を否定することなく認め、異性と出会える場所を充実させること。高齡者自身も積極的に参加し、そこで出会えた心惹かれる異性には、臆することなく交際を求めていくこと。一旦男女がスキンシップを交わせる関係になったら、その先は一切自在主、適悦、妙適へと至ることが可能となる。恍惚境である妙適から沸き起こる悦びがさらなるエネルギーを生み、一切自在主、慢、愛、愛縛、適悦へと伝播し、それぞれのステージを生き生きと輝かせていく。

しかし、そこまでは自己の内止まった満足感でしかない。そこから先へ進むには利他が円満でなければならぬ。つまり大衆を相手に与えるという利他が必要とされる。それを可能にするのは愛清浄である。なぜなら愛清浄は大衆に通ずるがゆえである。一切衆生を救おうとする大悲があつてこそ自利他円満が可能であると考ええる。

そこから先は、人間のどろどろとした性欲が浄化され、さらなるステージがその人の身の上と、身の内に表れることとなる。それはその人の日常を豊かにし、周囲をも明るく豊かに和ませてゆく。

正しく自己の Sexuality と向かい合ったならば、その先に開けてゆく境地は、完全に充足された自利他円満の菩薩の位であるのだ。年相応に枯れていくことや、世間の目を気にすることもない。十七清浄句はただ単に性欲肯定の句、肉体的な快樂養美の句にとどまらず、あるがままのいのちを、存分に輝かせてゆける、その道筋を教えてくれる句なのである。

清浄なる菩薩の位に至るならば、自分たちのみならず周囲の人たちをも巻き込んで、完全に幸福にしてゆけるのである。それは衆生救済ともいえるべきことがらであり、高齡期において達成される金剛薩埵の姿そのものといえるのではないだろうか。

注 記

- (1) 作家神崎京介は、朝日新聞二〇〇六年八月二二日夕刊「こころの風景」というコラムで、高校生のころは、物欲や性欲を捨て枯れた老人こそ人生の神髄に触れられると考え、自分もそのような枯れた老人に

なることを理想としていたが、五十歳近くの現在、決して枯れたいとは思っていないことを述べている。

(2) 藤久ミネ 山本直英編集代表『老年の性 人間の生涯と性4』大月書店、一九九四年、一一五頁

(3) 南日本新聞社編著『老春の門 輝け！高齢化社会』ミネルヴァ書房、一九八五年、一四九頁

(4) 朝日新聞「こころ」のページ編『老いること愛すること…老後の性を考える』社会保険出版社、一九九一年、一三四頁

(5) 吉沢勲『介護のための老人問題実践シリーズ② 老人の性』中央法規出版、一九九五年、九四頁・高橋久美子『老年期の性 老人の性意識と再婚意識の分析』家政学雑誌、Vol.35, No.4, 一九八四年、二七六一二八六頁・荒木乳根子『ホームヘルパーブックシリーズ⑪ 在宅ケアで出会う高齢者の性』中央法規、一九九九年、六九頁

(6) 吉沢『介護のための老人問題実践シリーズ② 老人の性』前掲書

(7) 井上勝也『老年の臨床心理』川島書店、一九八三年、一八三頁

(8) 倉西憲一「七部成就書における大樂思想について」仏教文化学会紀要、仏教文化学会編、一九九九年、四〇頁

(9) 松長有慶『理趣経』中公文庫、二〇〇二年、六五頁

(10) 金岡秀友『現代人の仏教9 さとりの秘密 理趣経』筑摩書房、一九六五年、二二八頁

(11) 真言乗とは、宇宙の実相を一身に体験し、自らその実相となり、有無の二辺を超越した生活をなすところに永劫不滅の大樂を得ることができるとする教えである。

(12) 梅尾祥雲『梅尾全集V 理趣経の研究』密教文化研究所、一九五九年、四一八―四一九頁

(13) 吉原登覺『即身』における「大樂」の「理趣」について『神戸商船大学紀要、神戸商船大学図書館委員会、通号6、一九五八年、一二五―一四七頁

(14) 梅尾『梅尾全集V 理趣経の研究』前掲書、一二二頁

(15) 金岡『現代人の仏教9 さとりの秘密 理趣経』前掲書、五〇―五一頁

(16) 梅尾『梅尾全集V 理趣経の研究』前掲書、一二三―一二四頁

(17) 同書、一一五―一一六頁

(18) 同書、四一八―四二二頁

(19) 同書、四三七頁

(20) 同書、四三八頁

(21) E・H・エリクソン、J・M・エリクソン、H・Q・キヴニツク著、朝長正徳・朝長梨枝子訳『老年期』みず書房、一九九二年

(22) ここで述べる愛とは、「一草一木の上にも、同情の涙をそそぎ、自己の一切を投げ出し、一切を奉げ、生命力としての愛そのものを、一心に把握することになり、愛の権化として、自ら全一をいきることになる。これを無限の聖愛とも、無我の愛とも、同体大悲ともいう」(梅尾『梅尾全集V 理趣経の研究』前掲書、六一頁)

(23) 同書、六三頁

- (24) 中村元『佛教語大辞典』東京書籍、一九七五年
- (25) 朝日新聞「こころ」のページ編『老いること愛すること…老後の性を考える』社会保険出版社、一九九一年、七頁
- (26) 神林隆浄『大蔵経講座6 大日経・理趣経講義』名著出版、一九七六年、三四七頁
- (27) セクシュアリティ研究会編著「カラダと気持ち ミドル・シニア版」三五館、二〇〇二年、一二五頁
- (28) 神林『大蔵経講座6 大日経・理趣経講義』前掲書、三四五頁
- (29) 新国訳大蔵経 12密教部4『金剛頂経・理趣経他』、大蔵出版、二〇〇四年、(『理趣経』二一三頁)
- (30) 梅尾『梅尾全集V 理趣経の研究』前掲書、四二六頁
- (31) 神林『大蔵経講座6 大日経・理趣経講義』前掲書、三六〇―三六一頁
- (32) 朝日新聞「こころ」のページ編『老いること愛すること…老後の性を考える』前掲書、四四頁
- (33) 梅尾『梅尾全集V 理趣経の研究』前掲書、一二三頁
- (34) 金岡『現代人の仏教9 さとりの秘密 理趣経』前掲書、五五頁
- (35) 『新国訳大蔵経』前掲書、一二三頁
- (36) 南日本新聞社編著『老春の門 輝け！高齢化社会』前掲書、一三五頁
- (37) 金岡『現代人の仏教9 さとりの秘密 理趣経』前掲書、五六頁
- (38) 磯 典理『老人ホームにおける性』井上勝也・荒木乳根子編『現代のエスプリ 老いと性』Vol.301、至文堂、一九九二年、六八―六九頁

(39) 南日本新聞社編著『老春の門 輝け！高齢化社会』前掲書、一二九―一三〇頁